

科目名	心理学実験2			ナンバリング	PSY143	授業形態	実験
対象学年	2 年	開講時期	後期	科目分類	選択	単位数	2 単位
代表教員	名取洋典	担当教員	窪田文子、山本佳子、末次晃、大原貴弘、大島典子、高島翠				

授業の概要	心理学基礎実験1に引き続き、心理学研究のさまざまな研究技法をさらに深く理解するとともに、とレポート作成スキルの向上を図る。本授業では、グループで行う実験が中心になる。下に列举した8つのテーマが用意されている。基礎実験1よりも発展的な内容(統計処理の方法、コンピュータソフトウェアの使い方、文献検索の仕方など)であり、卒業研究で実際に使用する知識やスキルが多く含まれている。また、基礎実験1と同様に提出レポートの講評の回も用意されており、これまでに身につけたレポート作成スキルをさらなる向上を図る。授業は、基本的にグループ単位で実施し、毎週1つのテーマについて取り組む。テーマごとにレポートが課され、それらによって成績を評価する。						
到達目標	1 実験等の実施方法の基礎的な知識を身につける。 2 実験等の結果を、決められた形式(目的、方法、結果、考察)でレポートにまとめることができる。 3 実施したテーマに関連する知識を習得する。 4 統計に関する実践的な知識とスキルを身につける。						
学習のアドバイス (勉強方法、履修に必要な予備知識など)	単位取得のためには、平均点が60点以上であることが必要である。レポートが提出されないと、そのテーマの評価は0点になり、平均点は下がる。「心理と人間行動」をメジャーとする学生は、心理学実験1とあわせて履修することが望ましい。なお、初回の講義を無断で欠席した場合は、単位修得は難しくなるので注意すること。						
ディプロマポリシーとの 関連	【教養学部 地域教養学科のディプロマポリシー】						
	○	1. 専攻分野それぞれの基礎的な知識を確実に身につけ、それらを活用して基本的な問題を解決することができる。					
		2. 専攻分野それぞれの基本的スキルを、地域社会に貢献するために活用することができる。					
	○	3. 自分の意見や考えを説明し、他者と協調して積極的にコミュニケーションをとることができる。					
	○	4. 広い視野と論理的・批判的思考力を身につけ、困難な課題や予測不能な事態に直面しても適切に対処することができる。					
		5. 社会の一員としての自覚を持ち、社会生活の場において、地域を支える社会人・職業人としてふさわし関心・意欲・態度を示すことができる。					

標準的な到達レベル(合格ライン)の目安	理想的な到達レベルの目安
1 授業に参加し、実験者と実験参加者の役割を経験することができる 2 レポート講評回に参加し、レポートの改善点を知ることができる 3 実施した実験についてのレポートを、チェックリスト(別紙)に従って作成しようと試みる ことができる	1 授業に参加し、実験者と実験参加者の役割を決められた手続きに従って担うことができる 2 レポート講評回に参加し、レポートの改善点を理解し、レポートの内容を改善することができる 3 実施した実験についてのレポートを、チェックリスト(別紙)に従って作成することができる

成績評価観点 評価方法	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合
授業態度・授業への参加	○		○	○			10%
実験レポート	○	○	○	○	○		90%

課題、評価のフィードバック	毎回のレポートは担当教員が添削した上で返却する。また、レポート講評の回では、担当者全員が、各回のレポートについて、全体的な注意、問題点の指摘、補足等を述べることでレポート作成に関するフィードバックを行う。
---------------	--

	回次	テーマ	授業内容	備考
授業計画	第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明する。	
	第2回	プライミング1 (末次・大原)	コンピュータソフトを使った実験を計画する。	
	第3回	プライミング2 (末次・大原)	実験を実施する。	
	第4回	社会的認知の実験 (末次・大原)	実験を実施する。	
	第5回	錯視の実験 (高島)	実験を実施する。	
	第6回	多変量解析用のデータ収集 (名取)	質問紙調査を作成し、実施する。データをコンピュータソフトを使って入力する	
	第7回	多変量解析1 (名取)	基本統計量(記述統計量)と相関係数をコンピュータソフトを使って算出する	
	第8回	多変量解析2 (名取)	コンピュータソフトを使って因子分析を行う	
	第9回	多変量解析3 (名取)	分析した結果のレポートでの示し方について説明する。学生は実際にコンピュータソフトを使って図表を作成する。	
	第10回	レポート講評1	提出されてきた実験レポートについて、改善に向けた注意点を共有する	
	第11回	心理検査に関する説明 (窪田・大島・山本)	心理検査とはどのようなものなのかについて解説する。レポート作成上の注意点についてもあわせて説明する。	
	第12回	催眠 (窪田)	実験を実施する。	
	第13回	PFスタディ (山本)	心理検査を実施する。	
	第14回	箱庭 (大島)	箱庭の作成を体験する。	
	第15回	レポート講評2	提出されてきた実験レポートについて、改善に向けた注意点を共有する	
	試験	定期試験は実施しない。		
授業の進め方		所属する班が割り当てられた実験種目を教員の指示のもとで実施する。		
授業外学習の指示		事前にその週のテーマについて自分で調べておく(20分)。実験の回は、授業後、実施した実験のレポートを作成する(120分)。また、講評の回に備えて、各回の内容をノートに整理しておくこと(60分)。 (授業外学習時間： 毎週 ー 分)		

教科書	使用しない。適宜、資料を配付する。
参考書	適宜、授業中に紹介する。
参考URLなど	
その他	1 レポートの提出、返却にはmanabaのレポート機能を利用する(テーマによっては使用しないこともある)。 2 第2回～14回の実施順は、班によって異なる。第1回で配布する資料(実施計画)を参照すること。

心理学基礎実験レポートの書き方チェックリスト

< 共通チェック項目：種目によっては該当しないことがあります（教員指示） >

- ☐ 提出期限を守って提出されている・正しい提出先に提出している
- ☐ レポートの1枚目に、提出者の学籍番号・名前が書かれている
- ☐ A4用紙縦長・横書きで、「学籍番号+提出者名+実験名」のファイル名である
- ☐ 「である調」で統一して書かれている
- ☐ 誤字脱字・漢字変換ミス等がない
- ☐ 数字は半角文字になっている
- ☐ 目的・方法・結果・考察の4部構成になっている
- ☐ 方法・結果の時制が過去形で書かれている
- ☐ 方法は、項目ごと（例 参加者・材料・手続きなど）に書かれている
- ☐ 結果には、データの分析方法が明記されている
- ☐ 図表を挿入するときには、図表について本文中に記述されている
- ☐ 図のタイトルは下に、表のタイトルは上に書かれている
- ☐ 図（グラフ）の縦軸・横軸が明記されている
- ☐ 図表に必要な単位が表記されている
- ☐ 考察は、得られた結果に基づいている
- ☐ 考察は、目的に対する答えになっている
- ☐ 必要な場合、引用文献が明記されている
- ☐ ひとのレポートや文章をさも自分で書いたかのようにコピーしない

< 実施種目に特有のチェック項目 >

- ☐
- ☐

< 最終チェック項目：この点が満たされていないと評価点は0になります >

- ☐ 担当教員の指示に従ってレポートを作成している。